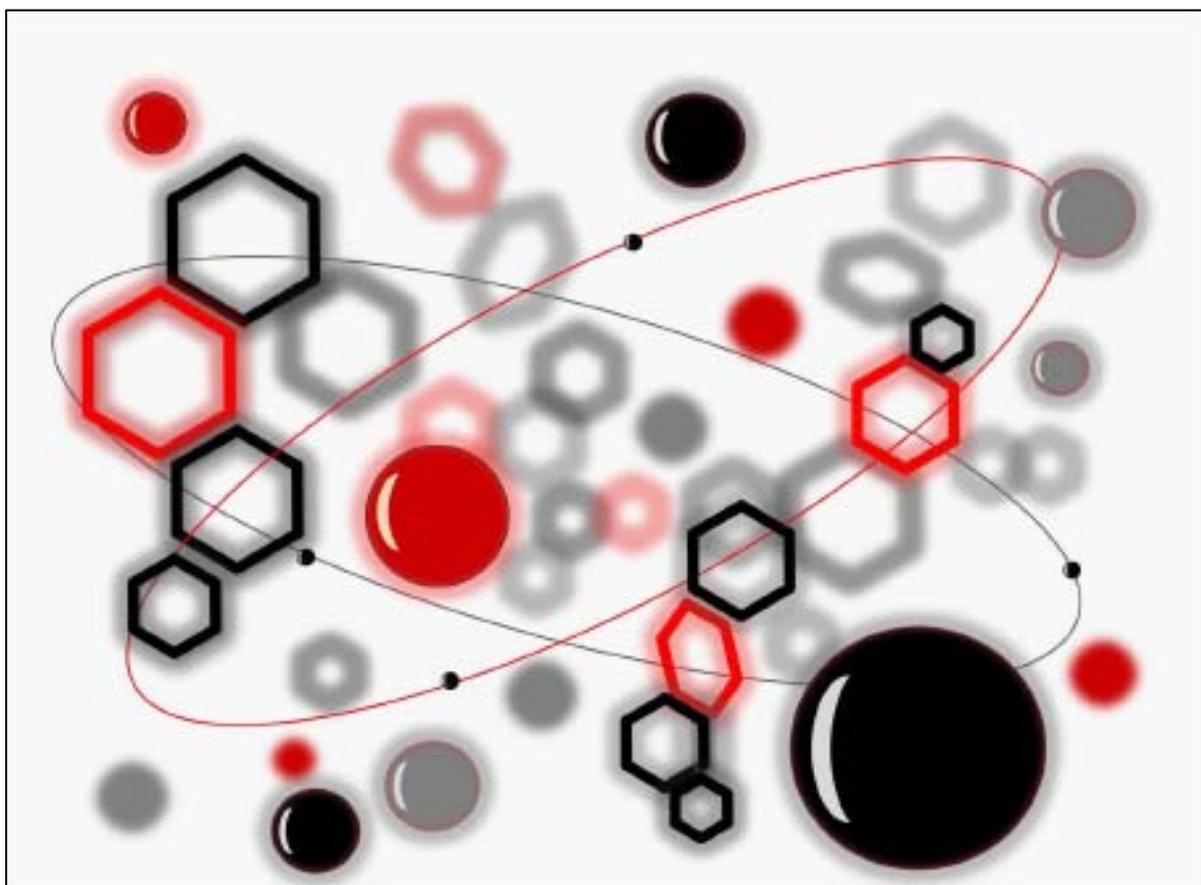


琉大化學

第 31 号



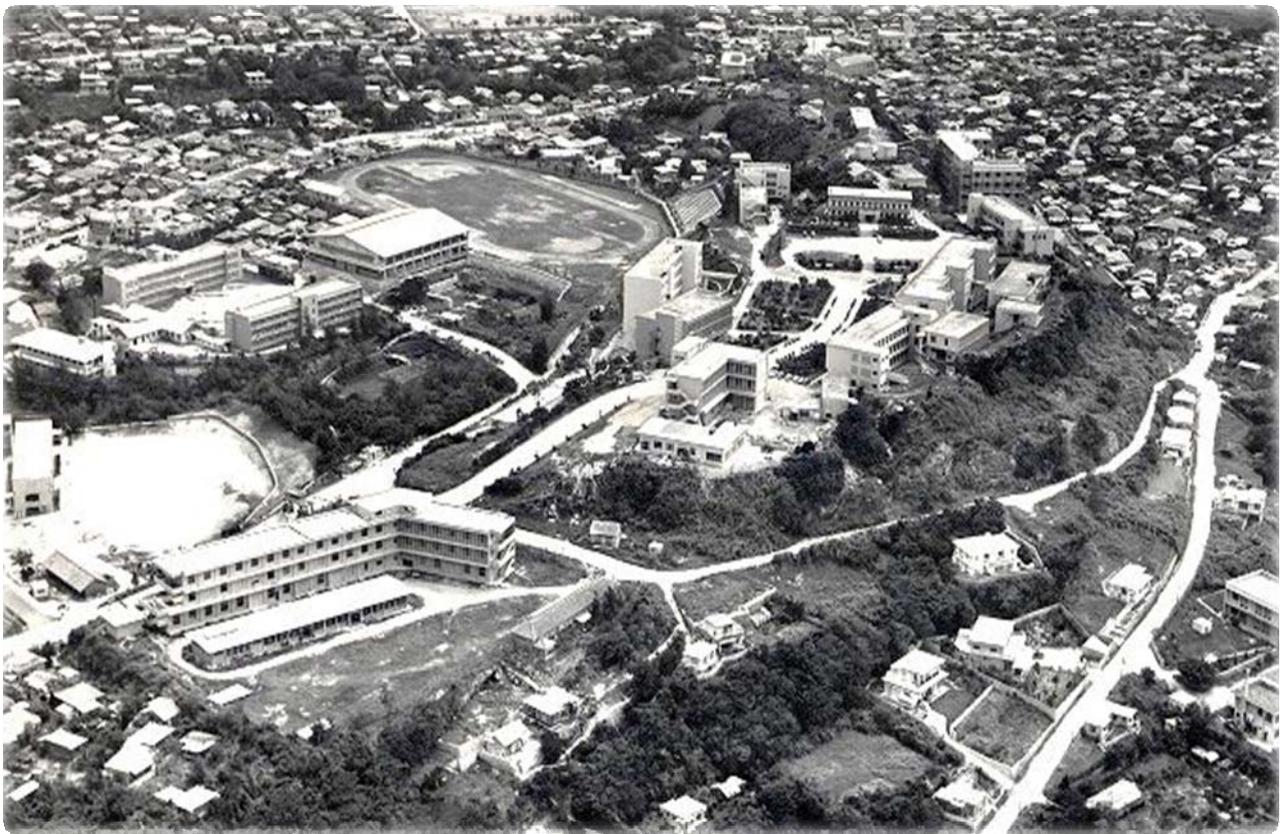
2016年 11 月

琉球大学化学同窓会

(空：表紙ウラ)



現在の首里城



首里キャンパス

『琉大化学 31号』目次

■ 『琉大化学』第31号の発刊によせて

同窓会会長 30期 田場 繁 1

■ 比嘉辰雄先生を偲んで

比嘉研究室の頃 教授 田中 淳一 3

比嘉辰雄先生をしのんで 教授 大出 茂 4

■ 外間宏三先生を偲んで

外間宏三先生を偲んで 名誉教授 與儀 誠一 5

外間宏三先生との思い出 准教授 荻原 和仁 6

■ 先生方随筆～研究室紹介～

大学人として四半世紀が過ぎて、、、教授 安里 英治 9

■ あれから～卒業生の近況～

50年前のこと・など 17期 根間 俊明 11

沖縄での37年間を振り返って 30期 岩本 利章 13

大学の交友は一生のつながり 30期 儀間 清浩 14

イレギュラー 30期 天願 雅也 15

学生時代、自然災害、いま想うこと 30期 當眞 辰彦 17

30期生の思い出 18

■ 勉強まっしぐら！～現役学生から～

宮古島に対する思い 4年次 与那覇 愛理 19

アルバイトを通して学んだこと 4年次 上原 力 20

■ 化学科のあゆみ

琉球大学における化学科の変遷 21

琉大化学ロゴマークの紹介 名誉教授 與儀 誠一 32

■ 同窓会

新規会員名簿（平成28年度） 33

理工学研究科所属一覧 35

外国人会員名簿 37

平成28年度 役員・各期幹事名簿 39

琉球大学化学同窓会会則 40

琉大逍遥歌 43

編集後記（知念 浄） 44

「琉大化学」第31号の発刊によせて

琉球大学化学同窓会会長 田場 繁（第30期）

「琉大化学」第31号の発刊に当たり、ご挨拶を申し上げます。

同窓会会員の皆様におかれましては、さまざまな分野においてご活躍、ご健勝のこととお喜び申し上げます。

さて、今年度は我々30期生が幹事を担当することになりました。30期生が理学部化学科に入学したのは1979年（昭和54年）です。この年、2月にイラン革命が起こり世界で第二次石油危機が発生、国内ではポケモンGO並みのインベーダーゲームが大流行、10月に琉球大学医学部が開設される中（学生募集は翌年から実施）、我々は第1回共通一次試験を経て入学しました。

月日は流れ、昨夏、29期生の先輩よりEメールで次年度の役員名簿を提出して欲しい旨のご連絡を受けましたのが、事の始まりでした。今春、29期生の先輩方々より琉大化学系の会議室で引き継ぎを行い、活動が始まりました。メールやスマホ、ケータイなどの通信技術を駆使し、毎週連絡を取り合い、毎月1～2回ファーストフード店やレストラン、商業施設内のフードコートなどで準備会を開き、右も左も分からず手さぐりの中、諸準備を進めてまいりました。休日の午後に店内で小学校・高校の校長先生、地方自治体の幹部、气象台の管理者、民間企業の社長、主婦、サラリーマンらが数十年ぶりに再会し、会合を重ねる様は、外野から見るとまさしく同窓会ならではの光景ではなかったでしょうか。

琉球大学化学科は、単一学科で毎年同窓会・会報誌発行を行っている唯一の学科とうかがっております。今回もこの活動を継承することは、なかなかの重責でした。今年度も無事実施することができましたのは、ひとえに、これまでの同窓会活動並びに活動記録を継承してこられた諸先輩方や、お忙しい折りにも関わらず寄稿文をご執筆して頂きました化学科ゆかりの先生方・卒業生・在学生、また、会員名簿のとりまとめをして頂きました各期幹事の皆様と、諸準備に多大なご協力を頂きました琉大化学系事務室の皆様のご協力の賜物でございます。

皆様へ心から感謝申し上げますとともに、皆様のご健勝・ご多幸をお祈り申し上げます、発刊の辞と致します。

(空：挨拶ウラ)

比嘉辰雄先生を偲んで

(空：合紙ウラ)

比嘉研究室の頃

田中 淳一

比嘉辰雄先生（以下、先生）が5月末に亡くなられてから、3か月になる。この文章が出る頃には半年が経っていることだろう。2月頃まではメールが来たりしてお元気だったのだが、3月に判明したリンパ腫の進行が早く、あっけなく最期を迎えられた。見舞いの際に知らされた数年前の肺癌以外に、大病をされていた覚えもなく、極めて健康だったのに残念でならない。先生、あるいは比嘉研究室（以下、比嘉研）を少し振り返ってみる。

先生はオハイオ州立大学での反応機構の研究で学位を取得され、「海洋天然物の父」と呼ばれたハワイ大学の故 Scheuer 教授の下でポスドクをされた後、1976年に海洋学科の助教授として着任された。1996年の理学部改組で海洋自然科学科となるまでは別組織だったので、20年以上前の化学同窓会の皆様と退職後の卒業生には馴染みがないかもしれない。尤も、一緒にセミナーをしていた国吉・上江田研の卒業生の中には、記憶に残っている方もおられるでしょう。

今は世界遺産の首里城にあった琉大は、現在とは比べ物にならない場所で、海洋学科の授業は主にプレハブ教室で行われていた。その頃の先生の印象は、アメリカ生活が長かったせいか内容を英語で板書され、日本語より英語が上手な印象だった。移転前の比嘉研は石嶺の農場跡や旧農学ビルの空部屋を利用していたが、1980年に移転した現キャンパスにやっと部屋がもたらえた。理学研究科も同時に発足し、先生の下で私は修士を目指した。これまで36年も風雨に晒されてきた理学ビルも当時は新しく、大工仕事が得意な先生はカラムのフレームや棚などを手作りされた。現在も高価な機械はないが、当時は悲惨で1986年までHPLCもなく、分析機器もIRだけだった。一番必要なNMRやMSなどは1990年代半ばまで他大学に依頼・依存していた。しかし、この何もないhungryさが良かったのかもしれない。

1982年に修士を修了後、先生の指示で助手に応募して採用され、紆余曲折はあったものの、2005年に退職されるまで海洋天然物の研究と学生の指導と一緒に取り組んだ。しかし、採用の34年後に先生の追悼文を書くことになるなど、当時は全く想像できなかった。

何かの際に海洋学科の故 Y 先生が学科で一番怖い先生と言われていたが、あんな感じで学生や同僚を怒れる先生は今時いない。「壁ドン」を外国の研究所でもしたと聞いたことがある。今ならパワハラとされるのが関の山だろう。しかし、退職される頃にはかなり丸くなられ、さらに病床では以前にストレスをかけたことを申し訳ないと語られていた。今では、怒られたこともいい思い出なのに！

比嘉研の特徴は、先生が国際的だったことだろう。メールなどですぐに連絡が取れる以前から、私が知る範囲でもかなりの外国の研究者と交流があった。Jefford, Bowden, Christophersen, Tan 教授などしばらく滞在された教員以外にも、短期で訪問された人が多くいた。内容によっては、私も一緒に論文や学会発表に名前を連ねた。

ともあれ、27年間続いた Higa school からは、学士51名、修士37名、博士3名が旅立ち、そのうち、大学教員として16名、それ以外の研究員として13名が活躍している。先生の薫陶を受けた者がそれぞれの場で活躍していることに、天国の先生は目を細めているかもしれない。

比嘉辰雄先生をしのんで

大出 茂

今はなつかしい首里キャンパスで比嘉先生にはじめてお会いしたのは、1978年10月1日のことでした。海洋学科助手として赴任した私は理学ビル前のプレハブ教室で1978年度後期からはじめて開講された授業、海洋化学実験を比嘉先生と2人で担当することになりました。海水中の栄養塩化学分析および塩分測定用の海水ビューレット、海水ピペット（15mL）を使った学生実験等今ではなつかしい思い出です。当時、海洋学科の教員数名は石嶺農場に研究室を持っていました。1979年4月、石嶺農場実験室から首里キャンパス旧農学ビルへ移り、1年後、首里から現在の理学ビルへ1980年4月に移転、やっと落ち着いて研究ができるようになりました。とはいっても設備が何もなく、1990年半ばになってやっとNMR等が導入されるまでは研究設備の面で比嘉先生は大変苦勞して海洋天然物化学の研究を継続しておられたものと想像します。ただし、私にとって首里に住み、比嘉先生にいろいろな面でお世話になった首里時代の1年半が一番の思い出であります。

オハイオ大学で学位をとり、ハワイ大学で長年研究された比嘉先生は1985年頃から研究の場をフロリダ、つぎにスペインの研究所へと移し、国際共同研究を展開し活躍されておられました。1989年10月、スペインからの帰路、当時、私が在外研究で滞在していたケンブリッジへ立ち寄られ、沖縄から同様に在外研究でケンブリッジに来ておられた西平功先生（沖縄国際大学）宅にて時間を忘れてしまうまで3名で教育、研究、大学の事など語り合ったことが、今ではなつかしい思い出となりました。その後、比嘉先生は琉球大学に貢献したいとの強い思いから研究担当理事に就任し、ケンブリッジでお話しになっておられた研究推進、展開等について比嘉先生的手法で努力されたものと私は高く評価しております。

また私事ですが、比嘉先生の勧めもあり、1984年にハワイ大学、テキサス農工大学へ1年、さらに1989年から1年半、ケンブリッジ大学へ留学、研究観を広げるとともに表面電離型質量分析計を使った同位体測定を道具として新しい研究をスタートすることができたことなど比嘉先生のサポートに感謝しております。2年程前に化学系事務室で、お元気そうな比嘉先生にお会いしたのが最後になってしまいました。

ご冥福を心からお祈りいたします。

外間宏三先生を偲んで

(空：合紙ウラ)

外間宏三先生を偲んで

琉球大学名誉教授 與儀 誠一

私が先生と出会ってから48年が経ちました。最初に先生の傍で仕事をさせていただいたのは化学科が第一理学ビルから第二理学ビルに移転後、小生が教養部の一般化学担当から理工学部の高分子化学担当になった時の1968年からです。当時は米国式の学科制で、専門分野の区分はありませんでした。大学は琉球政府立から1972年の復帰と同時に国立大学になり、初めて化学科も無機化学、分析化学、物理化学および有機化学の4分野の講座で、それぞれ教授1、助教授1、助手1人の小講座になりました。そこで小生も先生のもとで教育・研究に携わらせていただきました。

先生は琉球大学開学間もない1952年に赴任され、当時は薬品も研究費もない時代で大学の使命である「研究と教育」の片方だけの状況でした。先生は教育に情熱を注がれる傍ら、当地でもできる研究として植物成分に目を付けられ、月桃の精油成分やラワン材の成分研究をされておりました。ラワン材から新規化合物を結晶として得ておりましたが、構造決定に必要な機器がなく、他大学に測定依頼をしても時間がかかり、そうこうしている内に新規化合物の構造決定は他の研究室に先を越されてしまい残念がられておられたことを覚えております。教官室もない第一理学ビルに先生がおられる時、実験室でこのような話をされておりました。その当時、先生は九州大学生産科学研究所の柘植乙彦先生の研究室でのアジン化合物の熱分解を研究され論文をまとめておられました。その縁があって小生も柘植教授の研究指導を受けることが出来ました。

先生が関わった最初の化学科卒業生は1954年の第二回卒業式で理学部26名中、化学科8名だそうです(琉球大学五十年史より)。国立大学になる以前は学生も少人数であり、学生と教官の関わりが密だったと思います。正月には学生は先生のお宅に伺い、小生も加わり新年を過ごしたものです。先生は退官後も年に一度の化学同窓会に出席されることを楽しみにされておられましたが、十数年前から視力がわるくなり、その後はご出席されておりませんでした。同窓会での先生のスピーチを楽しみにしている同窓生も多かったのですがそれが叶えられずに十数年が過ぎたことが残念です。先生はいつも卒業生の活躍を気にされておりました。在職中も人事異動が新聞に掲載されると丹念に調べておられました。数年前まではお持ちの携帯電話から小生に卒業生の動向を尋ねておりましたが最近はこちらからも連絡せず気にしていたところでした。

三十数年、化学科と歩み、化学科の発展に大きく貢献されたことと共に、多くの卒業生の教育と研究に影響を与えてくれました先生の生涯に感謝して心よりご冥福をお祈りします。

外間宏三先生との思い出

琉球大学理学部

海洋自然科学科化学系

荻原和仁

(化学科 29 期・修士 3 期)

米国施政権下、琉球大学創設間もない困難な時代から約 40 年間、琉球大学で有機化学分野の教育と研究に携わってこられました琉球大学名誉教授外間宏三先生が、平成 28 年（西暦 2016 年）8 月 13 日 95 歳をもって永眠されました。ここに慎んで、お悔やみ申し上げます。

29 期の学生：泉川定留江嬢、上原悦子嬢（現：上江田）、佐藤邦明君、當銘孝枝嬢（現：小畑）、渡名喜守明君、外間政一郎君および荻原の 7 名が外間宏三先生の有機化学研究室に配属されたのは、先生がちょうど還暦を迎えられる年でありました。有機化学研究室には外間先生の他、助教授として與儀誠一先生が、助手として比嘉松武先生がおられ、精力的に有機化学分野の教育・研究に力を注がれ、外間先生を支えておられました。研究室の行事で思い出されるのは、外間先生の誕生日に開いた誕生会の時の出来事です。外間先生を驚かそうとロウソクが 60 本立てられる特大のケーキを数日前から注文し、誕生日を研究室の皆で楽しみにしていました。そのケーキにロウソクを 60 本立て、点火し、誕生会の歌を合唱後、先生に一気に吹き消していただくようとみんなで声をお掛けしました。外間先生は、いつものように、にこやかな笑顔で、ロウソクの炎を吹き消しに掛かったのですが、何せ 60 本のロウソクです。ケーキの上はちょっとした小火状態で、炎で熱いし、本数も多いしで一気に吹き消すことはできず、真っ赤な顔をされながら何度も吹き消しておられ、大変な苦勞をさせてしまいました。この出来事は、研究室に配属された 29 期生にとって、外間先生との懐かしい思い出となっているようです。

さて、私ですが、大学院に進学したこともあり、先生の有機化学研究室で 3 年間、お世話になりました。しかし、先生の教官人生 40 年間の中で最も先生の手を焼かした最後の学生（『出来の悪い弟子』）であったかと自負しています。外間先生の意向は無視しまして、勝手ながら、弟子と名乗らせていただきます。私が学生時代から化学科の教官になってからまでの外間先生とのエピソードを交えて、先生を偲びたいと思います。

外間先生が、儒教で解く五徳の中で「仁」、「礼」および「義」、すなわち、『心の中で相手を思いやり（仁）、その思いやりを目に見える形で示し（礼）、行動する（義）。つまり、相手のことを思いやった行動をとること。』を重んじ、大切にされ、学生に対してご指導されてこられたことは、有機化学研究室の卒業生のみならず、当時の化学科卒業生の皆さん全員ご存知のことだったと思います。最初のエピソードは、私が研究室に配属された年のことです。私の卒業研究テーマは、「ニガウリの苦みの成分について」でした。そう、あのゴーヤ（学名：*Momordica*

charantia L.、一般名：ツルレイシ)です。1月の終わりに入り、私の卒業研究も終盤を迎えていましたが、遊離した脂肪酸やステロイド類は単離できていたものの、未だに苦みの成分については見つけることができないでいました。外間先生の誕生日の数日前、実験セミナー（研究進捗状況報告会）を開催し、私の報告を聞いて先生方も頭を悩ましていました。実験セミナーが終わった後、抽出物を溶媒で分配する操作の過程で、もしかしたらその苦みの成分を捨ててしまっているのではないかということに気が付き、あわてて追試実験を行なっておりました。それを聞いた先生が、今でも忘れられませんが、真っ赤な顔をして実験室に来て、

「荻原君、大事なサンプルを捨てたって。一体君は何をしているのかね。」と、すごい勢いで、雷を落とされました。後で聞いたのですが、40年間の大学教官生活の中で後にも先にも雷を落とされたのはこの一回だけということでした。この日は、先生の誕生日で、この追試実験に追われ、実は、例の60本のロウソクが飾られたケーキをみることもできなければ、そのロウソクを消すのに先生が大変苦勞されたところに立ち会うこともできなかったのです。ただ、研究室の皆が先生を楽しませるべく計画した誕生日会で、先生を憂鬱な気持ちで過ごさせてしまったことには間違いなく、大変申し訳なく思っております。後でわかったことですが、このゴーヤの研究は18年の歳月を費やして来た研究で、私が研究室に配属になる1年前に、この研究に終止符を打つと研究室の意を集結し、高価であった溶媒とゴーヤに研究費をつぎ込んで望んだ研究でした。その大事なサンプルを捨てたのですから、雷が落ちても致し方ないと、期待に応えられなかったことを今でも悔やんでいます。この一件で、「試料採集や試料漬けてくれた先輩たちの行為を無にするようなこと（実験）を行なっていないか、大事なサンプルを確認する前に捨てていないか、研究というものは何年もかかって達成されるもので、たった一つの実験の失敗が、数年間続いてきた研究を停滞させる。」という、研究者がもたなければならない素養の「いろは」を先生から教えていただき、叱咤激励として今でも感謝しております。これは、就職した社会人にも言えることで、相手方との応対の善し悪しで、これまで先輩たちが、もしかしたら社長が築き上げてきた相手方との信頼を一気に失うことに繋がりがねないので、仕事内容を一つ一つ確認しながら行ないなさいということになります。今で言う「ハウレンソウ（報告、連絡、相談）」で、先生が大事にされていた『相手のことを思いやった行動』であります。

また、こんなエピソードもあります。私が大学院生（修士の学生）の時のことでもあります。当時の私は、研究テーマをゴーヤから生態相関物質に関する研究へと換え、研究を続けることとなります。研究を続けるにあたっては、高度な知識と研究結果をプレゼンテーションするという能力とが必要となります。そこで、比嘉先生からのお誘いもあり、発表はしないのですが、知識を得るため、および、発表方法を学ぶために学会に参加することを決めました。学会に出発する数日前、浮かれていると、外間先生から

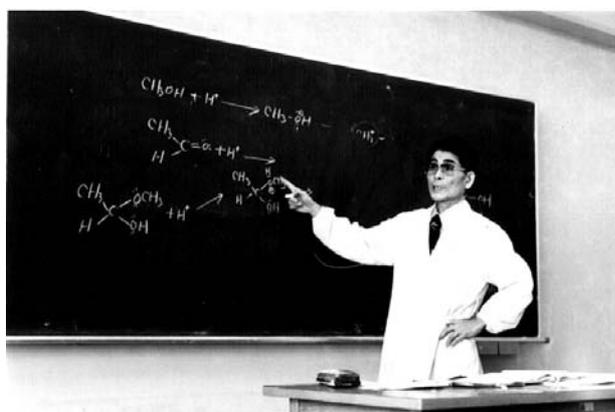
「荻原君、ちょっと。部屋に来てくれる。」と声をかけられました。すぐに、お部屋を訪ねると、
「荻原君。君、学会に行くそうだね。なぜ、僕に報告しないのかね。」

と、雷とまではいかなかったのですが、叱咤されました。そうです、また、「ホウレンソウ」を忘れていたのです。その場でお詫びを申し上げ、どうにか学会参加への許しを得ることができました。私が、『相手を思いやった行動をとること』を教えこまれた瞬間でありました。余談ですが、このとき参加した学会は、略称「テルペン討論会」と呼ばれるもので、今現在でも、研究室の学生と参加し、研究成果を発表させていただいています。何か、運命的なものを感じます。この学会に参加する度に、当時のことを思い出し、襟を正している次第です。本当に感謝しています。

さて、エピソードは、私が社会人になってからも続きます。ご縁が会って、琉球大学理学部化学科の教員に採用していただき、教官研究室もご退官された外間先生のお部屋を引き継ぎました。外間先生はご退官後も、琉球大学非常勤講師、沖縄県立芸術大学教授、沖縄県環境科学センター理事などを務められ、教育・研究のみならず環境問題にも尽力されました。そんなご多忙中でも、電話の対応の仕方、何かを依頼する時の事前の打ち合わせ・挨拶まわりの重要性等、『相手を思いやった行動をとること』を社会人になってからも、ご指導いただきました。このようにして、私も、先生が思っておられる程ではないにしろ、先生の教えを多少なりとも実行できるようになったと思っております。ただ、この教えを化学系の学生らへと引き継いでいるかということなかなかその指導はできず、60~70%というところでしょうか。外間先生の教育手腕の偉大さをさらに感じさせるところです。数年前に、先生が体調を崩され、友人らに先生に会っておきなさいと助言されていたのですが、忙しさを理由に先延ばしにし、結局、あいさつにも伺わず、今日に至ってしまいました。どうやら、まだまだ出来の悪い弟子のままのようです。もしかしたら、先生も弟子のことが心配で、「萩原君。まだまだだね。」と、今でも近くで見守っていただいているような、そんな気がします。

外間先生から、『相手を思いやった行動をとること』を教えていただいたのは、たぶん私だけでなく、外間先生と何らかのご縁が会った同窓生は、皆、首を縦に振られるのではないのでしょうか。やはり、すばらしい先生であったと思います。

外間宏三先生、長い間、ご指導いただきありがとうございました。先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。



外間先生の熱意のこもった有機化学の授業



退官祝賀会 奥様とツーショット

先生方随筆

～研究室紹介～



晴れた日に農学部から理学部を望む

(空：合紙ウラ)

大学人として四半世紀が過ぎて、、、

安里 英治

琉球大学理学部海洋自然科学科 化学系

私は琉大化学科の卒業生（31期）です。毎年の化学同窓会への出席を楽しみにしている一人で、同窓会ではいつも参加者に学籍番号を尋ねるのが習慣になっています。学籍番号の意味を私の番号805301で紐解いていくと、最初の二桁は入学年度（1980年入学）、5は理学部、3は化学科、01は五十音順で1番目（姓：アサト）を表しています。8053XX生は首里キャンパスで学生生活を経験した最後の学生です。理学部は1980年に現在の西原キャンパスに移転を済ませていましたが、1、2年次の教養課程は首里キャンパスで講義があるため、最初の2年間は首里と西原を往復する生活を送っていました（この原稿を書きながら懐かしく思い出しているところです）。

さて、その旧805301生。出身母校である理学部化学科無機化学講座に着任したのは、1990年6月でした。当時の教授は桂幸昭先生、助教授は普久原朝喜先生が務めておられ、上原與盛先生が講座外として無機化学の教育に携わっておられました。その後、化学科は現在の海洋自然科学科化学系へと看板が変わり、着任以来26年が経過した今日では、恩師は全員退職され、この旧805301生もすっかり古手の教員になってしまいました。

この同窓会誌への原稿依頼が「研究室紹介」ですので、研究の話も少しばかりさせてください。

私の専門は「金属錯体合成化学」です。合成化学を標榜している以上、合成する錯体は常に新規化合物でなければいけません。実は新規錯体の合成は決して難しい実験ではなく、周期表の中で圧倒的に数多い金属イオンの誰かを主役を選び、それに結合させる配位子を選択してフラスコ中で反応させ、生成物（=新規錯体）を単離してしまえば作業は終了です（実際には、結晶性が悪い、精製が難しいなどの理由で単離できない事の方が多いのですが）。ただしこの作業がサイエンスとして成立するためには、「金属と配位子の組み合わせ」に関する合成屋の慧眼、すなわちどの組み合わせがどのような性質（反応性、酸化還元特性、触媒能、磁性、電導性、生理活性、等々）を導くのか、あらかじめ予見できる能力を必要とします。従って、最終的な機能を予想して分子設計を行うこの錯体合成手法を、機能設計と呼ぶ場合もあります。理論化学の発展に伴い、最近では錯体構造をモデル化してその座標をコンピューターに読み込ませ、それから電子状態を計算し

て機能性を予見することも可能となりましたが、私の研究室では依然として長年の経験と知識、そして勘に頼って機能設計を行っています。実際の合成作業に関しては、新しい金属イオンは合成開発できないので、新規有機配位子の合成に力を注ぐこととなります。そのため普段から赤外吸収スペクトル、NMR スペクトル、マススペクトルを駆使しており、研究室の雰囲気は有機合成研究室に近い感じです。配位子合成が確認できれば、金属塩（例えば塩化コバルト(II)、酢酸マンガン(II)、等）との反応に進みますが、空気に不安定な錯体を扱う場合も多いので、この最終ステップを不活性ガス雰囲気下で行う場合もあります。この一連の作業で新規錯体が得られれば、単結晶 X 線構造解析という手法で錯体構造を決定します。金属錯体の諸々の性質は全てその分子構造を反映した電子状態によって決定されるので、錯体の性質を理論的に解釈する上で、その構造情報は大変重要な意味を持ちます。以前は X 線構造解析装置が琉球大学になかったので大変苦労しましたが、7～8年前に機器分析支援センターにこの装置が導入され、研究のスピードが飛躍的に向上しました。

錯体化学ではどの金属イオンを主役に選んでも良いので、私自身の研究も多岐に渡っており、時間軸に沿って代表的なテーマを紹介すると、①潰瘍治療薬としてのビスマスクエン酸錯体の構造決定、②抗ピロリ菌剤としての新規ビスマス製剤の開発、③大環状配位子を利用する四核金属錯体合成法の確立、④強磁性的な挙動を示す混合原子価マンガン三核錯体、⑤多プロトン共役多電子移動型多核金属錯体の研究、等々が挙げられます。最近はニッケル二核錯体によるニトリル水和触媒の開発に取り組んでいます。従来、ニトリル水和反応は触媒無しでは進行しない反応です。安価なニッケル錯体でニトリル水和触媒能が実現したのは世界で最初の例だと思われ、現在は反応の最適化条件を探っている段階です。

大学の研究予算が大幅に削減され、研究を続けることにストレスさえ感じる昨今ではありますが、まだ10年の現役生活が残されています。研究させて頂くことを幸せに思い、これからも学生と一緒に研究生活を楽しんでいきたいと思いません。同窓会の皆様、今後もしもご指導、ご支援を頂けますよう宜しくお願い申し上げます。

あれから～卒業生の近況



龍潭池から首里キャンパスを望む（移転前）



かつての風景(30期)

(空:合紙ウラ)

50年前のこと・など

17期 根間俊明

私の母校（高校）の伝統行事に「卒業50年を祝う会」というのがある。卒業して満50年を迎える期の大同期会ではあるが、先輩、後輩たちも一同に会して50周年を祝ってくれる。そして、今年がその50年目の年である。このことは、今から50年前に私が琉球大学に入学し、化学科の学生となったことを意味する。入学した同期は18名で、卒業は14名（内女子3名）だった。そして、この中から2組のカップルが誕生した。入学した当時、化学科は文理学部に属していたが卒業時は理工学部であった。あつと言う間の半世紀、当時の記憶も薄れているがかすかな記憶を辿ってタイムスリップしてみる。まず、守礼門右手の緩やかな上り坂を上っていくと左手に守衛室があり、その先左手には志喜屋記念図書館があった。更にその奥左手に理系ビルがあり、化学科の他に物理学科、生物学科が入っていた。理系ビルは4階建てで低地に建てられていたため、ビルとキャンパスは2本の橋で繋がっていた。このビルで2年間過ごし、3年時からは新しく出来た第2理系ビルに移った。

4年次になると卒研の教室選択があった。卒業研究は私たちの1つ先輩までは特殊研究と言って選択科目だった。必修科目になったのは私たちの時からで卒論の発表会も行われるようになった。手元に当時のプログラムが残っているが、それには「第1回卒業研究発表会プログラム 日時：1970年2月27日（金）午前9時30分より 会場：第2理系ビル102教室」とある。私は安良城君と平良（初男）先生の教室に入り、放射化学を専攻した。先生は留学（ハワイ大）から戻られて間もない頃で、私たちが平良教室の1期生である。さて、卒業後は各々の道を進むことになったが、教員が最も多くて8名、県警本部（鑑識）2名、民間2名、研究室（琉大）1名であった。研究室に残った宇地原（敏夫）君は数年前に琉大を教授で退官したので教えを受けた後輩たちも多いことだろう。私の就職先は当時の琉球気象庁だった。これも化学科卒では私が最初であるが^(*)、その後、多くの後輩たちが気象庁へ入ってきた。挙げれば、22期の宮城治夫君、24期の當間 浩君、30期の知念 浄、當眞辰彦両君、32期の重吉 学君等である。今回、幹事期の知念君から原稿執筆の依頼を受け、職場の先輩としても引き受けざるを得なかった次第である。後輩たちの頑張りを期待する。

（*）私の3期先輩の（故）幸地一雄さんも気象台にいましたが、先輩は教師を辞めて気象台に入ったため、採用は私の1年半後である。

最後に、首里キャンパスの思い出の一つ。教育ビルの裏手に詩人・佐藤惣之助の詩碑（詩の一節）があった。

有名な、「しづかさよ、空しさよ

この首里の都の宵のいろを

誰に見せやう 眺めさせやう」

である。古城の跡に建てられた琉球大学は首里の高台と言われる一段と高いところにあった。

そして、宵時の周りの静けさは何とも表現し難く、また、キャンパスの一角にあった生協食堂の前庭から眺める那覇の夜景は何とも言えない絶景であった。遠くには慶良間諸島が見られ、眼下には木々に包まれた金城町があり、そこにはまだ昔を偲ばせる石畳の道が保存されていた。夕暮れ時、キャンパスを包む静けさの中で、生協前の一角のベンチに腰を下ろし友と語り合うことは又、最高の一時であった。あれから 50 年の歳月が経った。



新入生歓迎野球大会



琉大奥の山荘合宿

沖縄での37年間を振り返って

岩本 利章

東京の大学を中退し、琉大に入り直してから、もう37年が過ぎふり返って見ると、沖縄での生活の方が2倍近くにもなっている。

大学に入ってすぐ、沖縄の自然を満喫できそうなサークルを探し入部をした。しかし、大学を一度中退した私は、受験費用から旅費、学費に至るまで自分で工面しなければならなかった。そのため、多くのバイト(家庭教師)を掛け持ちし、サークルに顔を出すことはたまにしかできず、バイトに明け暮れる日々であった。その中で、何とか時間をやりくりしていった西表島横断は強く印象に残っている。また、バイトに明け暮れる生活の中で、朝方まで語り合ったり、飲み明かしたりしたサークルや寮の仲間との人間関係は、現在に至るまで、私の人生に大きな影響を与えるとともに、心のよりどころとなっている。

さらに、家庭教師でお世話になった家庭との交流の中で、沖縄の社会が男、特に長男に甘い社会であるという思いを抱き、それが現在に至るまであまり変わっていないことも付け加えておきたい。

大学を卒業後、沖縄に残るか内地に戻るか迷ったが、東京での通勤の混雑や人間関係の希薄さ、また、沖縄の人々の温かさや温暖な気候、豊かな自然などを考え沖縄に残ることにした。大学で教職を取っていたこともあり教員になることにし、普通高校、小学校。工業高校、中学校などの臨任教師を経て小学校の教師になった。

本務としての振り出しは石垣島の豊かな自然に恵まれた小中併置校だった。学年の人数が10人前後の学校のため、いろいろな活動を子ども達と取り組むことができた。さとうきびから黒糖を作ったり、日本全国の小学校と手紙のやり取りをして交流をもったり、奈良の大仏の実物大の絵を描いたり、大きな学校ではなかなか共通理解や調整に時間がかかることも少人数の単学級ということでスムーズにできた。

教師生活で、理科専科を持つ機会が増えていく中、教育センターでの1年間の研修、石川少年自然の家での勤務は、その後の人生を大きく変える異動でもあった。石川少年自然の家は社会教育施設ではあるが、そこを利用する団体の多くは、小学校の宿泊学習に来る5年生である。そこでの勤務を通して、社会教育施設の重要性はもとより、体験を通して学ぶことの大切さや、協力して何かを成し遂げることを経験させることの重要性をより強く感じるようになった。

また、大学に入った時にできなかった沖縄の自然を楽しむことができたが、その一方で、豊かな自然を後世に残していくためにどのように子ども達へ伝えていくべきかを考えるようになった。

現在、校長として何校かの学校を経験しながら、生き物の写真を通して子ども達に沖縄の自然の豊かさを語りかけている。これからも多くの写真を撮り、子ども達に考えさせる教育を進めていきたい。

大学の交友は一生のつながり

第30期生 儀間清浩
県立首里東高校校長

進学を選択において大学選択は後悔していません。琉球大学に感謝しています。大学では先生方や理学部化学科同期生三十人、先輩の皆様や後輩の方々、また、バドミントンサークルの同期生や先輩、後輩等多くの方々と交流しました。

卒業後は県立高校へ理科教諭として就職し、久米島高校や向陽高校等で教鞭をとってきました。その間、教科指導や授業の展開方法など多くの仲間に助けられてきました。特に、高校の理科(化学)の指導者等で構成する化学研究会では多くの先輩や仲間と協議を重ね自身の指導力向上を図ることができました。その中では、何度か琉球大学に恩師を訪ね、指導を仰ぎ、研究会での講師や指導・助言を依頼してきました。また、管理者となってからも同研究会や高等学校理科研究会、高文連の自然科学専門部等とかかわりを持つことができました。私自身の教育活動の幅が広がり充実したものとなっています。

また、沖縄県バドミントン協会の理事となり県内・県外のバドミントン関係の運営に携わっています。また、趣味として地域でバドミントンサークルに参加し、共に汗を流し、ときには、大会に参加する等、充実した生活の糧となっています。

琉球大学へ通い、そこで学び、他学生や恩師等との交流やつながりがもて、そのおかげで前述の活動が大変充実したものとなっています。地元の大学であったことが県内での活動の場において気軽に相談でき、共に、活動していける所以となっています。私にとっては良いことであったと自信を持って言えます。

イレギュラー

30期 天願 雅也

卒業して30数年たつが、化学同窓会に関わったことはなかった。

今回、同期の知念浄君・當眞辰彦君（両氏とも気象庁勤務）と仕事上の繋がりから、同窓会の幹事期として声を掛けられたことでの偶然からである。（一種の災難？）

今日まで、出来るだけ誰にも知られずひっそりと生きてきたのに、とんだイレギュラーとなった。

しかし、久しぶりに同期の皆と顔を合わせながら話をすると、当時の事が思い出せ、懐かしさも手伝って案外、心地が良い。

又、同期の3人娘、翁長（現：金城）・阿嘉（現：友利）・徳村は学生時代より、さらにパワーUPした陽気さでラテンそのものだ。

30期生について思うには人数も少なく玉石混淆の感があるが、なかなか石（失礼）も多かったのでは？



（愛すべき輩たち）

当時は厳しい先生方が多く、提出期限を1秒でも過ぎたらレポートは受け取らないと先輩諸氏から注意を受けていた。

しかし、同期生の数名（常習犯）は期限を守らず、先生方が帰宅した後の教官室のドアの下からレポートを放り込むなど、さぞかし化学科の先生方にとっては厄介な輩が多かったことと思慮される。

そのエピソードとして、電気化学の最初の授業で、上原與盛先生開口一番「30期生は個性的と聞いて

いて楽しみです。」その裏には「こいつらを、このまま世に送り出しても良いものか」と悩んだ事も多々あるのでは？

その輩の一人である、自分は現在、某市役所に勤めている。研究室で、兼島清先生によく怒鳴られたが、その甲斐？あって市長に怒られても特段平気であり、（市長は会報誌を読むのかな？）現部署では人事も任されているのだから、我ながら驚きである。

組織として、人事は大変重要な事であり適材適所を基本としつつも、最近、メ

ンタル的に問題を抱えた職員が増えている産業医や臨床心理師及び保健師の意見を参考にしながら、慎重に人事異動の内示を出している。

しかし、「個人情報保護法」の制定以来、パブリックよりもパーソナルが重要視される風潮も手伝ってか、内示後は、異動のなかった職員や異動職員が配属された部署等からも個人的な感情からの容赦のない不平・不満の電話・メールが寄せられ、人事を行っていく毎に友達がいなくなってくる。(結構、気を使っているんですが！)

まあ、人事にしる仕事にしる、クレームを付ける職員は仕事や職場環境を少しでも良くしようと一生懸命なのだと勝手に思っているが、新しい部署に配属されても、「この部署には自分が必要だから配属されたのだ。」とプラス思考で物事をとらえる職員は、総じて優秀で、周りからの評価も高い職員が多いのは事実である。

兎にも角にも、学生時代ルール違反の常習犯だった自分が、今は普通の社会人として大した問題も起こさずに過ごせているので、11月5日の同窓会終了後は、また、出来るだけ誰にも知られずに、ひっそりと生きていきたと思っている。悪しからず。

「学生時代、自然災害、いま思うこと」

眞 辰彦

大学4年、放射化学分析専攻を希望した。平良初男先生のご指導の下で気の合う仲間と卒業研究の時を過ごしていた頃、放射能関連の勉強と国家資格取得を兼ね、「放射線取扱主任者試験」に向けてみんなでワイワイガヤガヤと、時に真面目に勉強に励み、受験のために東京へも出かけた。学生時代の記憶に残る楽しい思い出だ。とある時、化学科の掲示板に気象庁職員募集のポスターが掲示されて何気なく眺めていたところへ平良先生がやってきて、「気象庁でも放射能観測の仕事をやっているぞ」とポツリとおっしゃった。この小さな出来事とその後の私の人生に大きく影響することとなった。卒業と同時に気象庁に入庁、当初希望の放射能関連業務に就くことはなかったが、気象観測や予報業務などを経て、現在は気象防災分野の任に就いている。この間、仕事柄、様々な自然災害に間接的に、あるいは直接に接してきた。

平成23年3月11日、東日本大震災が発生した。地震直後、職場に響く緊急地震速報の警告音。モニター画面に映し出されるマグニチュードの値に私たち職員は息を呑み、とんでもないことが起こっていることを実感し始めたのだった。原発事故も発生した。これら出来事を契機に、人々の世の中の見方、考え方が大きく変わっていったのではないだろうか。日本は世界でも有数の自然災害大国である。例えば世界で起こるマグニチュード6以上の地震はこの小さな国土の日本で、実に2割も発生している（平成22年度防災白書の統計、震災以降はさらに増えていると推測）。世界の7%の活火山があり、また、台風、大雨・土砂災害、豪雪と、毎年、様々な自然災害に襲われてきた。この2~3年、御嶽山の噴火、伊豆大島・広島での大規模土石流で一気に多数の人命が失われ、去年は与那国島を最大瞬間風速81.1メートルの猛烈な台風が襲った。地球温暖化の進行とともに今後ますます台風等の熱帯低気圧の強度が増すとも言われている。台風には比較的耐性があるとされてきた沖縄だが、今後はこれまでの常識が通用しない事態も考えられる。心したいものだ

この原稿を書いている夜9時過ぎ。那覇市内自宅の窓から外を見れば、オスプレイらしき機影が市内若狭方面から北東の普天間方面へ向かって重低音を響かせ次々に通過していった。窓を閉め、スヤスヤと眠る5歳の娘を見て気持ちが和らぐ。娘が生きる未来の沖縄が事件事故のない平和で穏やかであってほしいと、その寝顔を見て心からそう思った。

30期生の思い出



勉強まっしぐら！ ～現役学生から～



理系複合棟ビルから北の方を望む

(空：合紙ウラ)

宮古島に対する思い

与那覇 愛里

大学に入学して月日が流れ、卒業が近づいています。大学に入学したことが最近のように感じられ、将来について不安感が募り、卒業することに寂しさも感じています。また、たくさんの先生方やたくさんの化学系の同級生との出会いは私にとってかけがえのないものであり、将来について考えるきっかけとなりました。

今回は私の将来の目標について述べようと思います。

私は、宮古島出身で大学進学までの19年間は宮古島で過ごしました。宮古島での学生生活は、お世辞にも良いものではなく学習面でも生活面でも満足したことはありません。学生の頃は宮古島で過ごしていて、どれだけ頑張っても本土や沖縄本島の同学年の人達にはかなわないと思っている部分もあり、どこか冷めていたような気がします。

大学進学を機に、宮古島を離れて楽しく過ごしていましたが何かが物足りない気がしていました。これは、おそらくホームシックだったのだと思います。故郷が大事であることは、離れてから分かると良く言われますが、本当にそうだと思います。宮古島では当たり前のようにいる家族やきれいな海や、畑しかない道など、今ではどれも好きなものばかりです。

私が今回、宮古島の話をした理由は将来の目標について述べたかったからです。私が宮古島を嫌いだった理由として、特に挙げているのが学習面の不便さです。同じようにこのことについて考えている宮古島の友達が多く、私たちがたどり着いたことは、私たち自身で宮古島の環境を変えていけばいい！ということでした。ある人は研究者になって宮古島の名前を広げ、ある人は役所の役員になり学校制度を変えていき、ある人は宮古島の文化を海外に伝えるといったように小さいかもしれないけれど、それぞれが宮古島について考え、たくさんの人が集まればいつかは変われると信じています。私は教員になって宮古島の学校で働くことで、宮古島の子ども達を育てていきたいと考えています。変えられるかどうかは分かりませんが、私が宮古島をさらにいい島にしていくことを期待していただき！

アルバイトを通して学んだこと

上原 力

私は大学生の間家庭教師のアルバイトをしていました。私が担当したある生徒は当時中学三年生で高校に進学はしたいが、勉強は全くしたくないという子でした。また受験まで4ヶ月半とあまり時間がありませんでした。初めてこのような状態の生徒の担当になったので正直どうしていいかわからず、とりあえず教科書や問題集を使って教え始めました。しかし、それは大きな間違いでした。彼はもともと勉強をほとんどしたことがなく興味も無かったので集中して話を聞いてもらえませんでした。なかなか授業も進まなくなり、最後には居眠りするようになり、とうとうどのように教えればよいかわからなくなりました。初め私は彼のやる気に問題があると考えていましたが、考えを変えて自分の教え方を変えなければならぬと思いました。そこで私はまず彼とよく話し、仲良くなり信頼関係を築くことにしました。そうすることで彼の事をよく知ることができなぜやる気がないかわかりました。彼がやる気を出せないのは、勉強しても理解できないのでつまらないからでした。そこで彼と話し合い一緒に明確な目標を立て復習から始め、彼のペースで教えるようにしました。また彼が理解できているかよく確認しながら教えるようにしました。次第に彼は自分で勉強する楽しさを見出し、志望校に合格しました。私はこの経験から人と信頼関係を築き向き合うことの大切さ、物事の本質を理解することの大切さを知りました。将来私が社会人として働く時には学んだことを生かし、周りの人とよく向き合い協力して働きたいと思います。

化学科のあゆみ



龍潭池から首里キャンパスを望む



理系複合棟ビルから北の方を望む~西原キャンパス

(空 : 合ウラ)

琉球大学における化学科の変遷

1950年（昭25） 開学

理学部物理化学21名（沖縄14, 大島4, 宮古2, 八重山1）

5月22日琉球大学開学と同時に理学部は発足。

化学専攻の授業科目は無機化学概論と有機化学概論であった。

当初化学専任の教官はなく、無機化学概論は新垣義一教授（琉球大学名誉教授）、有機化学概論は鎮西忠茂助教授（現農学部名誉教授）が担当した。

1951年（昭26） 応用学芸部，教育学部，英語部，理学部，社会科学部200名 （沖縄124, 大島49, 宮古17, 八重山10）

當真嗣徳が着任。

「1951年頃の首里キャンパスには薬品棚1個しかなく、薬品は新垣教授と鎮西助教授が米軍から貰った。蒸留装置はもちろんなく、天水を用いて実験をした。硝酸銀を溶かすには注射用アンプルの水を使用した。学生実験にはバケツ一杯の水と机の引出しに薬品をつめて教室に運んだものだった。直流電源には単一乾電池をつないで用いたし、熱源としてはアルコールランプを用いていた。」と話す。

1952年（昭27） 7月頃、旧農ビル完成

教育学部教育学，語学部（国語，英語），理学部（数学，物理学，化学，生物学）

社会科学部（政治及び法学，社会及び経済学，史学及び地理学）175名

外間宏三と兼島清が着任。

7月頃、旧農ビルが建設，薪で焚く蒸留装置が初めて入荷

4月、新学則により理学部を含む8学部をもつ小型の総合大学の中に化学科が誕生した。

《琉大化学科草創の頃の、那覇エキステンションセンターとの関わり》

エキステンションセンターとは、かつての沖縄民政府の工業試験場のことである。エキステンションセンターには、機械電気，醗酵，化学の3部門があり，校外普及部はここで，その活動として，機械修理工や溶接工と醗酵技術者の養成をしていた。化学関係は琉大の初期の理学部の化学実験を担当し，主として定性や定量分析の実験を行った。

実験室の何一つ無い時代で，実験は講義実験だけだったようで化学実験用の建物や実験室を求めていた。理学部化学専攻の学生のための実験室をつくることにし，ここに理学部化学専攻の学生のための実験室をつくった。

化学科第一回の卒業生はここ松川でやっと実験らしいものを初めて経験した。その頃の受講学生は2桁から3桁の学生番号をもつ15名の者でした。

4月から定量分析41時間を行っている。

7月末に旧農ビルが建設され、一階で再び実験室を改装し、実験室が完成した。実験器具類は全く貧弱で備品台帳にも化学天秤1台と記してある程度である。蒸留水も薪で焚く旧式の装置を用いていた。蒸留水は貴重品であった。

1953年（昭28） 1952年の専攻に家政学部家政学専攻が加わる

比嘉良夫が着任。

当真主任を中心に化学科の授業科目を整備。

初めて4年次までのカリキュラムが完成した。

授業科目

化学概論（4）当真担当，無機化学（6）当真担当，定性分析及び実験（6）兼島担当，有機化学（6）外間担当，定量分析及び実験（6）兼島担当，応用化学（6）比嘉担当，理論化学（6），化学実験（10）

（）内数字は年間単位数を示す。

1954年（昭29） 文理学部発足，化学専攻は化学科となる

国文，英文，政治及び法学，社会学及び経済学，史学及び地理学，数学，物理学

1954年（昭29） 化学，生物学合わせて約150名

4月には新学則により文理学部化学科となる。

前記カリキュラムははからずも理学部最後のものとなった。

実験（10）を（6）に変更，理論化学（3）開講，当真担当。

比嘉昭子が着任。化学概論と無機化学を担当。

森 巖着任。化学実験を担当。

1955年（昭30） 1954年と同じ学科で約195名

選択科目が新設

この年より専門科目を必修科目と選択科目に区分して履修させた

選択科目：応用化学Ⅱ（6）比嘉（良）担当，生物化学（3）外間担当，量子化学（3）当真担当，電気化学（3），特殊研究（6）化学実験は廃止。

特殊研究（6単位）が選択科目ながら開講されたのは，後年の卒業論文の準備態勢であった。

1956年（昭31） 4月理学ビル完成

4月には第1理学ビルが完成し，旧農ビルから移転。

新設科目：生物化学Ⅱ（3）外間担当，量子化学Ⅱ（3）当真担当，高分子化学（3）比嘉（良）担当

研究発表の機関誌発行の熱が高まり，未だ学生だった桂が原稿を集め，琉大化学創刊号が発刊された。化学科の学生と教官が自分の研究を発表した冊子である。

1957年（昭32） 1954年と同じ学科で215名

1958年（昭33） 国文，英文，史，地理，法政，社会，経済，商数，物理，化学，

生物あわせて約 220 名

応用化学 I, II がそれぞれ化学工学(3), 化学反応論 (3) に改められた。

1959 年 (昭 34) 1958年の学科に美術工芸学科が加わって約250名

1960 年 (昭 35) 学科単位での募集はじまる

文理学部化学科約 15 名

桂幸昭が着任 (無機化学担当)。

1962 年 (昭 37)

平良初男が着任 (教養実験担当) コロイド化学 (3) 新設

1963 年 (昭 38) 約 17 名

1964 年 (昭 39)

金城嘉昭が着任 (教養実験担当)

1965 年 (昭 40) 全学として募集人員は前年度並み。

新設科目: 天然物有機化学 (4) 森担当。

化学反応論が化学反応工学 (3) に再び改められる。

1966 年 (昭 41) 琉球政府立大学となる約 20 名

新設科目: 放射化学(3), 地球化学(3), 有機化学特論 (3)

1967 年 (昭 42) 理工学部化学科となる

3月28日第2理学ビルの建設着工。

4月1日付で学部改変により理工学部となる。化学科と生物学科が第2理学ビルへ移転した。

平良初男 (放射化学担当) が復職。

1968 年 (昭 43) 第2理学ビルに移転

2月29日に第2理学ビルは落成した。

新設科目: 無機化学特論 (3)

1969 年 (昭 44)

従来の定性分析 (6)、定量分析 (6) がそれぞれ分析化学 (8)、機器分析 (4) と改められた。

卒業研究 (6) とセミナー (2) が必修科目として開設された。

これは琉球大学の国立移管に向けての教育内容の充実を図ったものである。

選択科目の特殊研究は廃止。

与儀誠一 (高分子化学担当) が教養部から理工学部へ移籍。

1971 年 (昭 46)

宇地原敏夫 (物理化学) が着任

酒井勝郎 (無機化学教授) を島根大学から迎える。

(1971年12月～1975年(昭50))

1972年（昭47） 国立移管定員30名

金城昭夫（物理化学）と渡久山章（物理化学）が教養部から理工学部へ配置換え
5月大森保（分析化学）着任 12月比嘉松武（有機化学）着任

1974年（昭49）

上原與盛（無機化学）が着任

1975年（昭50）

普久原朝喜（無機化学）が福井大学教育学部から本学理学部へ出向

当真嗣徳教授が教養部へ、比嘉良夫教授は保健学部へ、森巖教授は教養部へ、金城嘉昭講師が教育学部へそれぞれ配置換えとなった。

比嘉昭子講師は渡米のため退職

《国立大移管における課題解決へ向けて》

1972年（昭47）5月15日に国立大学となるまで、本学科は学科目制ではなく、米国式の学科制とでもいえる学科運営であったので、学習指導の面では新しい学科目制度を適用するための新旧授業科目のよみ替えに関する事項は最も重要な問題であった。

移管前

カリキュラム改訂によって学生に不利益を与えないように配慮した。

イ) 高分子化学実験前後2単位（必修）の代替科目として有機電子論2単位

ロ) 無機化学実験前期は新便覧の電気化学実験1単位で代替

ハ) 旧便覧の理論化学前後期計6単位を新便覧の物理化学6単位と同実験1単位の計7単位でこれにあてる。

ニ) 定性分析化学は分析化学で、定量分析化学は機器分析で代替する等。

量子化学Ⅰ・Ⅱは当真教授、天然物化学は森教授、生化学概論は安里龍講師（保健学部）が担当している。

国立移管後

新設科目：有機機器分析（2）与儀担当と無機分離化学（2）桂担当

本学科の卒業要件は一般教育科目36単位以上、外国語科目12単位以上、保健体育科目4単位、専門教育科目（必修48、選択20以上、自選8以上）計76単位以上で合計128単位である。国立移管後は教育研究内容の充実に全精力を傾注したといっ
ってよかるう。その結果は1979年（昭54）4月における理工学部の発展改組となり、歴史は繰り返して、再び理学部化学科として力強く歩み始めた。本年までに384名の卒業生を社会に送り出したが、主な職種は教員35.2%官公署15.1%等である。各学科目の特殊な分野について講義をするため招聘教授を学科で毎年3～4名お願いしている。なお、化学科の教官定員は12名（教授4、助教

授 4，助手 4）であり，物理化学，分析化学，有機化学，無機化学の 4 学科目で構成され，学生定員は学年当たり 30 名である。

1979 年（昭 54） 理学部化学科となる

4 月 1 日に理工学部が理学部と工学部に分離した。それに伴って，化学科は理学部化学科になった。30 年にして歴史は繰り返されたのである。

4 講座で 12 名の教官 2 名の技官をようするようになった。

1980 年（昭 55） 千原移転

4 月 1 日に理学部に大学院理学研究科が設立。

理学研究科は 5 専攻（数学専攻、物理学専攻、化学専攻、生物専攻、海洋学専攻）21 講座からなり、化学専攻には物理化学講座、分析化学講座、有機化学講座、無機化学講座が置かれた。理学研究科の入学定員は 21 人で、化学専攻は 4 人の入学定員である。化学専攻では兼担の教官として森巖教授（教養部化学）と中田福市教授（医学部）が参加された。大学院生の教育は専任の教官、兼担の教官、それに招聘教授（非常勤講師）によって行われた。

1986 年（昭 61）

入学定員の増加で学定員 30 人から 35 人になる。

化学科に教授ポストが 1 つ増。

上原與盛助教授が教授に、普久原朝喜助手が講師にそれぞれ昇任。

1987 年（昭 62） 定員 35 名（臨時増募定員を含む）

1988 年（昭 63）

兼島清教授と外間宏三教授が定年で退官

両先生は 30 数年化学科と共に歩み、化学科の発展に大きく貢献、偉大な足跡を残された。

分析化学講座：平良初男助教授が教授に、大森保助手が講師に昇任。

有機化学講座：與儀誠一助教授が教授に、比嘉松武助手が講師に昇任。

1989 年（昭 64/平成元年）

棚原朗（琉大化学科 25 期卒）が分析化学講座の助手に着任

荻原和仁（琉大化学科 29 期卒）が有機化学実験担当の助手に着任

彼らの若いはつらつとしたエネルギーで教育研究も活発になった。

1990 年（平成 2）

安里英治（琉大化学科 31 期卒）が無機化学講座の助手に着任。

1996 年（平成 8） 3 月 31 日 化学科が消滅

1996 年（平成 8） 4 月 1 日 新学科 海洋自然科学科が誕生

化学科の職員は化学系として新学科の構成員となる、入学定員は 95 名（臨時増募定員を除く）となる。この半数が化学系の専門教育を受けることになる。

4月の理学部改組に伴い学科が消滅し新学科の海洋自然科学科に組み込まれた。海洋自然科学科は6つの大講座からなり、理学部と教養部の化学系と生物系の教官で構成されている。化学系は6つの大講座のうち分子機能化学、解析化学、海洋化学の3つの講座からなり、21人の定員（教授10人、助教授8人、助手3人）がある。

渡久山章助教授が教授に昇任

桂教授が学長に就任 理学部を離れる。普久原助教授が教授に昇任

堀内講師，田中助手，安里助手がそれぞれ助教授に昇任

棚原助手が理学部から割愛され，機器分析センターの助教授に昇任

1997年（平成9）

大森保助教授が教授に昇任 上門直子が助手に採用された。

1998年（平成10）

比嘉松武助教授が教授に昇任 米蔵誠哲が助手に採用された。

1999年（平成11）

理学部化学科最後の学生 34名が卒業した。

2000年（平成12）

海洋自然科学科（化学系）最初の卒業生を送り出した。

2001年（平成13）

10月 採用 新垣雄光（助手：琉大化学科37期卒）

2004年（平成16）

3月 退職 上原與盛、平良初男（理事就任4.1）

2005年（平成17）

3月 退職 比嘉辰雄

4月 昇任 大出茂（教授）

7月 昇任 上江田捷博（教授）、新垣雄光（助教授）

8月 昇任 又吉直子（講師）

2006年（平成18） 4月、国立大学から国立大学法人となる

3月 昇任 漢那洋子（講師）

3月 退職 普久原朝喜、仲宗根洋子

4月 採用 親泊美奈子（事務補佐員）

4月 昇任 堀内敬三（教授）

7月 採用 藤村弘行（助手：琉大化学科39期卒）、土岐知弘（助手）

2007年（平成19） 「学校教育法の一部を改正する法律」施行

1月 採用 玉城喜章（助手：琉大化学科43期卒）

3月 退職 與儀誠一

與儀誠一先生が Chemistry をデザイン化した『琉大化学のロゴマーク』を制作。

4月 「学校教育法の一部を改正する法律」施行

(大学教員の職階が教授・准教授・講師・助教・助手となる。)

4月 採用 高良聡 (講師：琉大化学科 40 期卒)

4月 昇任 田中淳一 (教授)

10月 採用 鈴鹿俊雅 (助教)

2008 年 (平成 20)

3月 退職 渡久山章

2009 年 (平成 21)

7月 昇任 藤村弘行 (准教授)

2010 年 (平成 22)

3月 退職 大森保、國吉正之

4月 採用 植村立 (助教)

6月 昇任 安里英治 (教授)

2011 年 (平成 23)

1月 昇任 新垣雄光 (教授)

4月 昇任 鈴鹿俊雅 (准教授)

8月 昇任 玉城喜章 (准教授)

10月 採用 有光暁 (助教)

2012 年 (平成 24)

7月 昇任 漢那洋子 (准教授)

10月 採用 中川鉄水 (助教)

11月 昇任 高良聡 (准教授)

2013 年 (平成 25)

4月 採用 東雅大 (助教)

3月 退職 宇地原敏夫、比嘉松武、宮城雄清

4月 昇任 植村立 (准教授)

2014 年 (平成 26)

4月 採用 石田哲夫 (教授)

5月 採用 棚原朗 (教授：琉大化学科 25 期卒)

2015 年 (平成 27)

3月 退職 親川千鶴子

5月 昇任 土岐知弘 (准教授)

2016 年 8 月 31 日現在

分子機能化学講座	教授	田中淳一、棚原朗
	准教授	米蔵誠哲、高良聡、土岐知弘
	講師	又吉直子
	助教	中川鉄水
解析化学講座	教授	大出茂、新垣雄光、堀内敬三、石田哲夫
	准教授	鈴鹿俊雅、荻原和仁
	助教	有光暁
海洋化学講座	教授	上江田捷博、安里英治
	准教授	藤村弘行、漢那洋子、玉城喜章、植村立
	助教	東雅大
化学系事務室	教務職員	上原理絵
	事務補佐員	親泊美奈子

旧化学科の講座

(1) 物理化学

教授 金城昭夫，助教授 渡久山章，助手 宇地原敏夫

主な授業科目として、物理化学（金城・渡久山），化学反応速度論（金城），溶液論（渡久山），物理化学実験（金城，渡久山，宇地原）等がおかれている。また物理化学の特殊な分野をカバーするために、諸大学からの招聘教授による物理化学特論が隔年に開設されている。

研究面では、金城は電荷移動錯体における電荷移動相互作用と水素結合の協同効果の研究、

ミセル中の蛍光プローブの消光反応を利用した、消光剤のミセルへの吸着状況と吸着量を決定する方法の研究を行っている。渡久山は炭酸カルシウムの同質多像形生成と多像形間の転位の研究、炭酸塩鉱物や岩石に含まれる微量元素の存在状態の研究、沖縄地域における物質の循環を知るための河川水、雨とドライフォールアウト、岩石や土壌の溶出の研究、海洋の化学的研究を行っている。宇地原は金城と共同で種々の物質が水相からミセルへ吸着される量を決定する方法を研究するとともに、ミセル水溶液中での色素と酸化還元剤との光酸化還元反応の速度及びその逆反応の速度についての研究を進めている。

研究室は第2理学ビル4階の一角にあり、主な教育研究備品として、自記分光光度計、分光蛍光光度計、双子差動型伝導微少熱量計等がある。

(2) 分析化学

教授 兼島清，助教授 平良初男，助手 大森保

主な授業科目は分析化学（兼島），分析化学実験（兼島，大森），放射化学（平良），放射化学実験（平良），機器分析（兼島），機器分析演習（平良）

研究面では兼島は琉球石灰岩の地球化学的研究，琉球諸島の水質の地球化学的研究，石灰岩地帯の水質の地球化学的研究，沖縄大東島産Rainbow Stoneの化学組成と鉱物組成，琉球諸島産マンガンノジュールのDTA，琉球諸島の島嶋の水質である。平良は琉球諸島産陸産マンガンノジュールの地球化学的研究，琉球諸島産石灰岩の放射化学的年代測定の研究，陸産マンガンノジュール中のU及びThとその同位体，深海性マンガンノジュールの放射化学的成長速度測定の一考察，琉球石灰岩地域に産するDolomite中のU及びThとその同位体についてであり，大森は炭酸塩物質の溶液化学的研究，海成炭酸塩の晶出，CaCO₃の結晶化過程の速度論的研究，琉球石灰岩の地球化学等について興味をもっている。

主な教育研究備品は、分光光電光度計（日立139型），DTA-TG測定装置（理学電気）、原子吸光分光光電光度計（日立207型，日立170-50A型），マルチチャンネル α 線測定装置等である。

(3) 有機化学

教授 外間宏三, 助教授 与儀誠一, 助手 比嘉松武

主な授業科目は有機化学Ⅰ(外間), 有機化学Ⅱ(外間), 高分子化学(与儀), 有機機器分析(与儀), 有機化学実験(比嘉), 有機反応論(招聘教授), 有機化学特論(招聘教授)

研究面については教官個々のそれぞれの研究分野が異なるいわゆる複合学科目ではないので, 三教官共同の研究態勢をとっている。研究分野は, ヘテロ原子(主として窒素原子)を含む新規環状化合物の合成, その光及び熱反応を柱に天然資源利用の一環としてグルコース, フルクトースその他の糖類あるいは製糖工業の副産物である廃糖蜜を原料に用い, 種々の微生物又は化学変換により有機化合物の合成, その他, 天然物, 主として植物成分の構造研究も行っている。

教育研究備品の主なものとして, GC質量分析計(日立RMU-6GC, 1972年(昭47)全学共同備品として設置されたが1979年(昭54)管理替えになった), 核磁気共鳴装置(日立R24, 文部省科学研究費補助金により設置), 元素分析装置(柳本高速CHNコーダーMT-2), 高速液体クロマトグラフ(日立633, 文部省科学研究費補助金により設置), 赤外分光光度計(日立EPI-S2), ガスクロマトグラフ(柳本G80)

(4) 無機化学

教授 桂幸昭, 助教授 上原興盛, 助手 普久原朝喜

主な授業科目は無機化学(桂), 電気化学(桂, 上原), 無機化学実験(桂, 普久原), 電気化学実験(上原), 錯塩化学(上原), 無難分離化学(桂)があり, コロイド化学と無機化学特論は隔年に招聘教授による集中講義を行っている。

研究面では, 桂は水溶液及び非水溶液の物性と電極反応, 酸化物電極の特性, オニウム化合物による水溶液の物性変化を利用した凝集沈殿, 溶媒抽出を含む金属イオンの分離化学に関する研究に興味を持ち, 上原は液体の構造と物性に関する研究及び液体理論の混合液体への適応に関する研究に興味をもっている。現在アルコール-水混合溶媒系でのイオン-溶媒相互作用及び溶媒構造との関係などについて研究している。普久原は水系, 非水溶媒系中における遷移金属(Co, Ni, Cu)の人工アミノ酸錯体の合成と異性体分離, 立体構造を物理化学的実験, 測定により解析し, 更にこれら溶媒系中での錯体の異性変化の機構について研究している。

主な教育研究備品には核磁気共鳴装置(JNM-MH-100)保健学部から管理替え, スペクトラムコンピューター(JEC-7E)全学共同利用から管理替え, ダブルビーム分光光電光度計(日立124形), デジタルポーラログラフ(柳本PE-21型), 自記ポーラログラフ(柳本P-8型)等がある。

化学系の講座

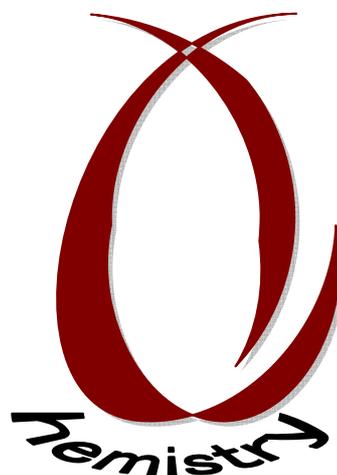
海洋自然科学科においては、大講座制を取っている。化学系は3つの大講座、分子機能化学、解析化学、海洋化学から構成されている。教育は物理化学、分析化学、有機化学、無機化学の4つの柱に基づいて行われ、科目担当は構成員全員が各自の専門分野を担当する。

『参考文献』

- * 琉球大学五十年史（琉球大学開学50周年記念史編集専門委員会）
- * 2001年以降、人事異動情報等を加筆

琉大化学のロゴマーク

琉球大学名誉教授 與儀 誠一



2007年、退職時に Chemistry をデザイン化しようと思いついたのが右の図です。「最初に思いつき、実行することが重要なのだ」というコロソバの卵のように化学の世界にも往々にしてこのようなことが当てはまると考え、割れた卵にデザインしました。

ちなみに以前の大学のマークは芭蕉の絵柄でしたがいつの間にかシャボン玉のように消えて今は昔のことになりました。卵ではありませんが割れやすいシャボン玉に懐かしさのあまり、琉球大学のマークを写しました。



**DEPARTMENT OF CHEMISTRY,
BIOLOGY AND MARINE SCIENCE
COLLEGE OF SCIENCE
UNIVERSITY OF THE RYUKYUS**

同窓会



(空 : 合紙ウラ)

新規会員名簿（平成28年度）

研 究 室 名	氏 名	出 身 校
棚 原 研 究 室	井 出 美 波	横浜栄高等学校（神奈川）
	謝 花 芽	球陽高等学校
田 中 研 究 室	星 野 勇 那	那覇国際高等学校
	鮫 島 海 理	豊田北高等学校（愛知）
米 蔵 研 究 室	國 吉 優	浦添高等学校
	比 嘉 佳 寿 美	那覇高等学校
	金 城 優 姫	沖縄尚学高等学校
高 良 研 究 室	當 真 幸 也	浦添高等学校
	比 嘉 大 貴	浦添高等学校
土 岐 研 究 室	上 原 力	浦添高等学校
	与 那 覇 愛 理	宮古高等学校
又 吉 研 究 室	藤 井 貴 博	那覇国際高等学校
	島 袋 泰 博	興南高等学校
中 川 研 究 室	築 地 和 枝	出水高等学校（鹿児島）
大 出 研 究 室	北 村 数 馬	佐世保南高等学校（長崎）
	比 嘉 聖 椰	普天間高等学校
	城 間 一 哲	知念高等学校
	牧 内 聖	沖縄尚学高等学校
石 田 研 究 室	小 那 覇 真 子	那覇国際高等学校
	真 久 田 彩	昭和薬科大学附属高等学校
	霜 田 南	名護高等学校
堀 内 研 究 室	菊 池 優 介	旭川北高等学校（北海道）
	松 尾 凌 太	白石高等学校（佐賀）
新 垣 研 究 室	平 良 知 之	知念高等学校
	座 安 里 穂	沖縄尚学高等学校
	五 十 嵐 洋 一	福岡大学附属大濠高等学校（福岡）
	金 城 信 之	那覇西高等学校
	新 垣 遼	普天間高等学校
荻 原 研 究 室	赤 嶺 保 幸	球陽高等学校
	東 比 嘉 美 裕	開邦高等学校
	照 屋 里 奈	那覇国際高等学校

鈴 鹿 研 究 室	谷 本 奏 太 稲 福 周	相洋高等学校（神奈川） 首里高等学校
有 光 研 究 室	照喜納 和翔	コザ高等学校
上 江 田 研 究 室	比嘉 祐太郎	那覇高等学校
安 里 研 究 室	平田 ちひろ 仲 門 拓磨	那覇高等学校 糸満高等学校
藤 村 研 究 室	小 泉 誠 一 小 倉 菜奈美	帝京大学高等学校（東京） 筑紫女学園高等学校（福岡）
玉 城 研 究 室	清 澤 研 造 大 城 さゆり	東福岡高等学校（福岡） 開邦高等学校
植 村 研 究 室	松 浦 立 樹 上 地 佑衣菜 喜 納 悠 大	根室高等学校（北海道） 向陽高等学校 コザ高等学校
東 研 究 室	亀 井 翔 矢 根 木 秀 佳	普天間高等学校 調布北高等学校（東京）

理工学研究科所属一覧

(M1)

研究室名	氏名	出身大学(国)	研究テーマ
棚原研究室	大城 康輝	琉球大学	洞窟内ラドンの経時変化
田中研究室	田中 志貴子	琉球大学	海綿の二次代謝物と共生バクテリアの関係
高良研究室	浅井 萌	琉球大学	酵素モデル錯体を用いたサンゴ類の石灰化促進に関する研究
中川研究室	佐次田 頌	琉球大学	水素貯蔵材料アンモニアボランの水素放出特性の改善
	平敷 大地	琉球大学	水素吸蔵合金を用いた CO ₂ のメタン化触媒開発
石田研究室	下地 康介	琉球大学	軟体動物における D-アミノ酸の機能と代謝の解明
新垣研究室	亀川 碧	琉球大学	河川・海水表面を覆う有機膜に含まれる界面活性剤の研究
	上原 裕幸	琉球大学	次亜塩素酸および次亜臭素酸の光分解に関する研究
鈴鹿研究室	末吉 寛夢	琉球大学	新規触媒による水中での反応の開発
安里研究室	喜屋武 結子	琉球大学	金属イオンがアシストする異常環化反応
藤村研究室	宮里 亜子	琉球大学	サンゴの抗酸化能増強による白化耐性機能の向上
	志柿 仁理	琉球大学	サンゴ骨格による川平湾水環境の変遷解析
植村研究室	大嶺 佳菜子	琉球大学	石筍中の流体包有物の安定同位体比分析
東研究室	水谷 亮	琉球大学	密度汎関数理論による溶液中のクロロフィル a 及びフィオフィチン a の物性に関する理論的研究

(M2)

研究室名	氏名	出身大学(国)	研究テーマ
田中研究室	Ana Faricha	インドネシア	抗B型肝炎ウイルス活性物質の探索
中川研究室	城間 真明	琉球大学	アンモニア回収法確立に向けた回収材料の評価
石田研究室	安田 翔	琉球大学	L-アミノ酸酸化酵素の触媒機能進化メカニズムの解明
	天願 竣治	琉球大学	安定同位体ラベルダブシルヒドラジンを利用したメタボローム解析法の開発
荻原研究室	渡辺 公美子	琉球大学	沖縄産植物の成分研究
藤村研究室	中村 将平	琉球大学	瀬底ビーチサンゴ礁における有機・無機炭素生産量
	五十嵐 雅明	福井工業大学	沖縄本島周辺海域における炭酸系成分の長期モニタリング
東研究室	山内 真梨江	琉球大学	分子動力学シミュレーションによる光捕集アンテナのサブユニット B820 に関する理論的研究
	安慶名 麻華	琉球大学	ビスジイミン銅(I)錯体の光励起ダイナミクスの理論的解明

(D2)

研究室名	氏名	出身大学(国)	研究テーマ
田中研究室	AHMADI PENI	インドネシア	抗 Dengue ウイルス活性等を示す海洋天然物の探索
新垣研究室	岩崎 綾	琉球大学	

(D3)

研究室名	氏名	出身大学(国)	研究テーマ
田中研究室	IDAM HERMAWAN	インドネシア	海綿および海産微細藻類の新規生理活性物質
	平出 裕美	明治薬科大学	抗インフルエンザウイルス活性を示す海洋天然物の探索
上江田研究室	ROY PRODIP KUMAR	バングラデシュ	Chemical Investigation on a Soft Coral <i>Cespitularia</i> sp. チェスピチュラリア属軟質サンゴの化学的研究

学年は平成 28 年 7 月 31 日現在

外国人会員名簿

	氏名	出身国	指導教官	備考
	昭和61年3月修了			
1	陳 英顕	台湾	外間 宏三	
	平成3年3月修了			
2	越 嘉平	中国	与儀 誠一	
	平成3年9月修了			
3	王 奇弗	中国	大森 保	
	平成4年9月修了			
4	彰 金輝	中国	平良 初男	
	平成5年9月修了			
5	Mmochi, Aviti John	タンザニア	渡久山 章	
	平成6年3月修了			
6	申 元範	韓国	大森 保	
	平成6年9月修了			
7	Mokolensang, Jeffrie Fredric	インドネシア	渡久山 章	
8	戸 海友	中国	平良 初男	
	平成7年9月修了			
9	徐 毒明	中国	平良 初男	
	平成8年3月修了			
10	陳 中笑	中国	大森 保	
	平成8年9月修了			
11	Karikari, Anthony Yaw	ガーナ	渡久山 章	
	平成9年3月修了			
12	ヌエス 仲村 イルマ	メキシコ	金城 昭夫	
	平成9年9月修了			
13	Mentang, Feny		上原 興盛	
14	N. P. Sukumaran		平良 初男	
	平成10年3月修了			
15	季 受映		大森 保	
	平成10年9月修了			
16	Chen, Su	中国	大森 保	
17	Maalim, Mohammed Kombo	タンザニア	渡久山 章	
	平成11年9月修了			
18	楊 晶源	中国	上原 興盛	
19	Kabir, MD. Humayun	バングラデシュ	平良 初男	
20	Marma, Mong Sano	バングラデシュ	国吉 正之	
	平成12年9月修了			
21	Agus Trianto	インドネシア	田中 淳一	
22	Uddin, MD. Jasim	バングラデシュ	比嘉 辰雄	
23	Issa, Hamad Hassan	タンザニア	比嘉 辰雄	
24	Sukpanyalert Pornpan	タイ	比嘉 辰雄	研究生
	平成13年9月修了			
25	Vuai, Said Ali	タンザニア	渡久山 章	
26	Sodngam, Sirirath	タイ	比嘉 辰雄	
27	Shrestha, Keshab Lal	ネパール	比嘉 辰雄	
28	Musri, Musman	インドネシア	比嘉 辰雄	博士後期課程
	平成14年9月修了			
29	Siwu Eric Richard Oktavianus	インドネシア	比嘉 辰雄	
30	Sheikh Muhammad Ali	タンザニア	大森 保	
31	Hossain Mirza MD. Mozaffar	バングラデシュ	大出 茂	
32	Roy, Michael Chandro	バングラデシュ	比嘉 辰雄	博士後期課程
	平成15年3月修了			
33	Juan Carlos Casilimas Rojas		大森 保	
	平成15年9月修了			
34	Issa, Hamad Hassan	タンザニア	比嘉 辰雄	博士後期課程
35	Kombo Mohamed Mkadam	タンザニア	渡久山 章	
36	Hamdun Asha Mansour	タンザニア	平良 初男	
37	Balansa Walter	インドネシア	比嘉 辰雄	
38	Wahome Paul Githige	ケニア	比嘉 辰雄	

	氏名	出身国	指導教官	備考
	平成16年9月修了			
39	Vuai, Said Ali	タンザニア	渡久山 章	博士後期課程
40	Koruwu Noviani Trisye	インドネシア	比嘉 辰雄	
41	Ramos Alexis Aguino	フィリピン	大出 茂	
42	Wang Xiao Chun	中国	大森 保	
	平成17年9月修了			
43	Hossain Mirza MD. Mozaffar	バングラデシュ	大出 茂	博士後期課程
44	Nose Holliness Manyama	ケニア	上江田 捷博	
45	Bakari Said Suleiman	タンザニア	渡久山 章	
46	Roring Verawati Ida Yani	インドネシア	田中 淳一	
	平成18年9月修了			
47	Kombo Mohamed Mkadam	タンザニア	渡久山 章	博士後期課程
48	Noah Naumih Mwende	ケニア	大森 保	
49	Hanif Novriyandi	インドネシア	田中 淳一	
50	Makhanu David Sujee	ケニア	国吉 正之	
51	Margiastuti Palupi	インドネシア	上江田 捷博	
	平成19年9月修了			
52	Armid	インドネシア	大出 茂	博士後期課程
53	Rob Tamanna	バングラデシュ	上江田 捷博	
	平成20年3月修了			
54	Taema Sia Imo	サモア	大森 保	博士後期課程
	平成20年9月修了			
55	Nilssen, Maren Haavorstad	ノルウェー	大出 茂	博士後期課程
56	Sheikh Muhammad Ali	タンザニア	大森 保	
57	Tianero, Ma. Diarey Bordon	フィリピン	田中 淳一	
	平成21年9月修了			
58	Fahmiati	インドネシア	大森 保	博士後期課程
59	Wilmar Maarisit	インドネシア	上江田 捷博	
	平成22年3月修了			
60	Uddin Mohammad Helal	バングラデシュ	田中 淳一	博士後期課程
	平成22年9月修了			
61	Alam Md. Mahbulul	バングラデシュ	安里 英治	博士後期課程
62	Wijaya Anugurah Ricky	インドネシア	大出 茂	
63	Idam Hermawan	インドネシア	田中 淳一	
64	Agus Trianto	インドネシア	田中 淳一	
	平成24年9月修了			
65	Sona Rani Roy	バングラデシュ	田中 淳一	博士後期課程
66	Ouchi, Aaron Kenkichi	アメリカ	大出 茂	
	平成25年9月修了			
67	Wijaya Anugurah Ricky	インドネシア	大出 茂	博士後期課程
68	Roy Prodip Kumar	バングラデシュ	上江田 捷博	
	平成26年9月修了			
69	Ahmadi Peni	インドネシア	田中 淳一	博士後期課程
	平成28年3月修了			
70	Desy Wulan Triningsih	インドネシア	田中 淳一	

平成 28 年度 役員・各期幹事名簿

1. 同窓会役員

顧問	渡久山 章	(琉球大学名誉教授)
会長	田場 繁	(30期)
副会長	國吉 元	(30期)
副会長	佐和田 正二	(31期)
事務局長	銘苺 実	(30期)
会計	金城 直子	(30期)
監査	儀間 清浩	(30期)
監査	並里 智浩	(31期)

2. 各期幹事

1期	大城 清一	26期	真栄里 美保	51期	伊敷 直純
2期	山城 次郎	27期	佐久本 守	52期	仲真 良秀
3期	伊礼 正	28期	幸地 綾子	53期	伊藤 道裕
4期	新垣 庸一郎	29期	荻原 和仁	54期	小谷 有司
5期	下地 康嗣	30期	田場 繁	55期	東江 浩
6期	友寄 英諄	31期	佐和田 正二	56期	神里 知洋
7期	仲里 利信	32期	長門 貴子	57期	田崎 盛也
8期	吉川 嘉勝	33期	大湾 雅一	58期	村田 正将
9期	伊良部 光男	34期	池原 朗	59期	又吉 健太郎
10期	渡久地 政治	35期	安里 利光	60期	兼次 陽大
11期	大城 忠一	36期	中村 健	61期	上里 裕紀
12期	金城 清	37期	平良 直秀	62期	渡辺 公美子
13期	高嶺 朝勇	38期	山里 崇	63期	田中 志貴子
14期	幸喜 稔	39期	武村 盛久		
15期	富永 勇	40期	瑞慶山 功		
16期	比嘉 敏勝	41期	赤嶺 成久		
17期	玉城 正信	42期	川満 永公		
18期	宮城 朝順	43期	宮城 健		
19期	佐久 眞章	44期	新屋敷 博人		
20期	糸数 初枝	45期	小島 健司		
21期	伊元 幸春	46期	真壁 慎治		
22期	西浜 完治	47期	国場 豊		
23期	與儀 勉	48期	米須 清彦		
24期	奥間 有	49期	伊志嶺 早苗		
25期	山田 保	50期	屋嘉比 康彦		

琉球大学化学同窓会会則

(目的)

第1条 本会の目的は、化学する心を育み、会員相互の親睦と琉球大学化学及び海洋自然科学の発展に貢献することを目的とする。

(名称及び事務局)

第2条 本会は、琉球大学化学同窓会と称し、事務局を理学部海洋自然科学科（化学系）事務室に置く。

(会員)

第3条 本会の会員は次のとおりとする。

- (1) 正会員 琉球大学化学科卒業生、海洋自然科学科卒業生、理工学研究科化学関連研究生並びに関連する大学院生。
- (2) 特別会員 正会員以外の琉球大学化学科現旧職員、及び琉球大学教官で本会の主旨に賛同する者。
- (3) 準会員 琉球大学化学科在学生、海洋自然科学科（化学系）在学生、及び正会員以外の同大学院生。
- (4) 賛助会員 本会の主旨に賛同し、役員会で推薦した者。

(事業)

第4条 本会は、前条の目的達成のために、次の事業を行う。

- (1) 会誌の発行
- (2) 会員名簿の管理
- (3) 琉球大学海洋自然科学科(化学系)教官の退職激励会及び叙勲者、受賞者の激励会。
- (4) その他、本会の目的達成のために必要な事業。

(会員の努め)

第5条 会員は転職、転居、改姓の都度、その旨本会事務局に通知するものとする。

(役員構成)

第6条 本会に次の役員を置く。

会長1名、副会長1名、事務局長1名、会計1名、書記2名、
琉大海洋自然科学科（化学系）幹事1名。
各期幹事1名、準会員幹事1名、会計監査委員2名。

(役員選出)

第7条 役員は次のとおり、会員の中から選出する。

- (1) 会長、副会長は各期持ち回りとし、総会において選出する。
- (2) 事務局長、会計、書記、会計監査委員は会長が委嘱する。
- (3) 琉大化学幹事は海洋自然科学科（化学系）主任があたる。

(4) 各期幹事は各期で互選する。役員は各期の幹事を兼ねることができる。

(役員の仕事)

第8条 役員の仕事は次のとおりとする。

- (1) 会長は、本会を代表し、会務を総括する。
- (2) 副会長は、会長を補佐し、会長に事故ある時は、その職務を代行する。
- (3) 事務局長は、会長の指示により、会務を統率し、その事務を処理する。
- (4) 会計は、会計事務を処理する。
- (5) 書記は、会議の議事録の整理と文書事務を処理する。
- (6) 琉大幹事は、大学側を代表し、大学と同窓会との連絡調整の任にあたり会務が円滑に遂行できるようにする。
- (7) 各期幹事は各期を代表し、同窓会と同期生との連絡調整の任にあたり、会務が円滑に遂行できるようにする。
- (8) 会計監査委員は、本会の財産及び会計等の諸帳簿を監査し、その結果を総会で報告する。

(顧問の設置)

第9条 本会は、特別会員及び本会に貢献した者の中から若干名の顧問を置くことができる。顧問は会長の相談に応ずる。

(役員、顧問の任期)

第10条 役員、顧問の任期は次のとおりとする。

- (1) 役員の仕事は1年とする。
- (2) 顧問の任期は2カ年とし、再任を妨げない。

(総会)

第11条 総会は年度1回、定期総会を開催する。

2. 定期総会は次の事項を審議決定する。

- (1) 会則の改正 (2) 役員を選出 (3) 会務報告及び会計報告
- (4) 予算、決算の承認 (5) その他必要な事項

3. 会長が必要と認めたときは、臨時総会を開催することができる。

4. 総会の議長は会長が務める。

(役員会)

第12条 役員会は第6条の役員で構成する。

2. 会長は必要に応じて、役員会を開催することができる。

3. 役員会の仕事は次のとおりとする。

- (1) 総会に提出する議案の審議。
- (2) 事業に関する企画と運営。
- (3) 正、特別、賛助会員の推薦。

(4) その他必要な事項。

4. 役員会は、役員のうち3割以上の出席をもって成立する。

5. 本会の会務執行は、役員会において、協議決定し、会員に通知する。

6. 役員会は、この会則に定められている事項のほか、急を要する事項について決定することができる。

(決議)

第13条 総会、役員会の決議は、出席者の過半数による。賛否同数の場合は議長の決するところによる。

(会費)

第14条 本会の会費は年間2,000円とする。但し、終身会費10,000円でこれに替える事ができる。

(運営費)

第15条 本会の運営費は次の収入をもって当てる。

(1) 会費 (2) 寄付金 (3) その他

(諸帳簿の備付)

第16条 本会に次の諸帳簿を備える

(1) 会員名簿 (2) 議事録 (3) 会費徴収簿 (4) 金銭出納簿 (5) 財産目録 (6)

備忘録綴

(会則の改正)

第17条 本会則の改正は総会の議決による。

(解散)

第18条 本会の解散は総会の議決による。

(会計年度)

第19条 本会の会計年度は4月1日に始まり、翌年3月31日をもって終了する。

(細則決定)

第20条 本会則の施行についての細則は、役員会の承認を得て、会長が定める。

付則

この会則は、平成3年9月14日から施行する。

付則

この会則は、平成10年11月14日から施行する。

付則

この会則は、平成18年2月25日から施行する。

付則

この会則は、平成23年1月22日から施行する。

琉大逍遙歌

1952年5月22日制定
 作詞 新川 豊
 作曲 渡久地 政一

♩=100 余りおそくなく、感情をこめて

1. ふるきのみやこにさすらいて
 1. とものなさけによいふして

せいきのあとをたずぬれば
 せいなみじゅうととかたらえば

ああるせいしゅんのちほうさえてはばこ
 あふあるせほしかげにちゆうきゆうのまこ

たくのひぞかみーちかーあーり
 たのひぞかみーちかーあーり

琉大逍遙歌

作詞 新川 豊
 作曲 渡久地 政一

一、ふるき都に さすらいて
 世紀のあとを 尋ぬれば
 ああ青春の 血はさえて
 羽ばたく希望 力あり

二、友の情けに 酔いふして
 南十字と 語らえば
 降る星影に 悠久の
 真理の光 萌むなり

三、われら若人 純情に
 巷の恋は うそぶけど
 見よ東雲に 翔りゆく
 且の生命 息吹あり

編集後記

知念 浄（平成 28 年度幹事）

今回の「琉大化学」第 31 号の出来はいかがでしょうか。寄稿いただいた琉大化学系の先生方、学生の皆さん、卒業生の皆様には、原稿執筆の快諾をいただき、おかげさまで何とか会誌を刊行することができました。皆様には心より感謝を申し上げます。また、昨年度当番の外間前会長ほか 29 期の皆様には、引継ぎも含めて作業のご教示をいただき、お礼申し上げます。

本年度は 30 期（1979 年（昭和 54 年）入学）が当番にあたり、総会準備や会誌編集作業を進めてきました。30 期生は在学途中での進路変更や卒業後の本土在住等により、沖縄在住の卒業生が 10 数名と少なく、準備作業も苦労がありました。田場会長が大学との連絡役や原稿依頼の調整等、各作業で皆をリードし、会誌冒頭の会長あいさつにもあるように、チームワークで半年間の作業を乗り切ることができました。田場会長にも感謝いたします。

今回の会誌第 31 号の寄稿のうち、執筆者の最年長は 17 期の根間俊明氏で（私の職場の大先輩でもあり）、大学入学から半世紀を振り返っての首里キャンパスでの思い出が綴られています。当時を懐かしく思い起こされる皆さんも多いかと思えます。卒業生の近況について寄稿いただいた、根間俊明氏と 30 期生の 4 名の皆さんに感謝いたします。また、故比嘉辰夫先生の追悼記を田中淳一教授と大出茂教授に、故外間宏三先生の追悼記を與儀誠一名誉教授と荻原和仁准教授に寄稿いただき、研究室紹介については安里英治教授に寄稿をいただきました。各先生方にあらためてお礼申し上げるとともに、比嘉辰夫先生と外間宏三先生のご冥福をお祈りします。

終わりに、同窓会準備作業にご支援いただいた化学系事務室の上原理恵さんに感謝申し上げるとともに、同窓会の皆様のご健勝とご多幸を 30 期生一同、心よりお祈り申し上げます。

来年は 31 期の皆さんが当番となります。頑張ってください。



表紙題字 森 巖 氏
表紙デザイン 仲宗根一哉 氏

自然界に存在している物象は、一見すると不規則な形をしていることが多いのですが、視座を変えるとある規則性をもった形に見ることがあります。私たちの日常生活においても、視点を変えることで新たに気づくことがあります。固定観念に囚われず、多角的に事象を眺めることが人生をより豊かにするよう
に思います。

琉大化学
第31号

発行 平成28年11月5日

発行者 琉球大学化学同窓会
沖縄県西原町千原一番地

琉球大学理学部
海洋自然科学科（化学系）事務室
TEL (098)895-8100
FAX (098)895-8565

印刷 (株) 沖縄コピーセンター
沖縄県那覇市泉崎1丁目21番
地19
TEL (098) 867-4339